日本医科大学基礎科学紀要に寄せて

―基礎科学は永遠です―

日本医科大学武蔵境校舎事務室長
星野　聡

ようやく日本医大を去る時が訪れました。

文系の大学を出て、1978 年に日本医科大学に就職し、最初に配属されたのが教務課（当時は学務課）でした。以来 42 年間、主に大学事務、途中病院事務として勤務し、多くの方々に力づけられ、助けられながら、ようやく長い勤務が終わろうとしています。

就職当時は、高橋秀実名誉教授、横田裕行名誉教授が 5 年生の時で、下の学年には弦間昭彦学長、坂本篤裕理事長、伊藤保彦医学教育センター長、安武正弘医学部長、大友康裕東京医科歯科大教授、猪口正孝東京都医師会副会長など、現在、日本医大の内外で活躍している多くの先生方が学生として在籍していました。いまだに横田先生は、第三者に私を紹介する際には、私に学生時代の成績を握られていることを持ち出してしまいます。その後、多摩永山病院、腎クリニックなどに勤務し、2001 年に教務課に戻り、以来大学事務を行って来ましたが、その時の卒業生もよく覚えています。この中から、いずれ日本医大を背負って立つ者が現れるのだろうと思うと楽しみです。

ただ、卒業生でよく覚えているのは、やはり再試験の申し込みに頻繁に訪れた者、留年者の特別クラスに入れられ、頻繁な試験を課せられていた者、いわゆる成績が低空飛行の学生達です。そんな彼らに会うと、「学生時代はお世話になりました」と挨拶されますが、お世話というのは出席カード 2 枚あげただけです。そんなおおらかな時代でした。なお、現在教授を務めている先生方に当時出席カードを 2 枚渡したかは残念ながら記憶にございません。

そんな卒業生達も昔のことを語ると、丸子のことしか出てきません。「丸子は良かった」「福田池で泳いだ」など、学生時代＝丸子、学生時代の楽しい思い出

は丸子に集約されてしまっています。「星野さんには丸子でお世話になりました」とよく言われますが、私は新丸子校舎で勤務したことはなく、彼らの記憶の中では私までも丸子にいたことにされてしまっているようです。

武蔵境に校舎が移転して、過去を知る私には新丸子校舎の施設・環境面での有り余るほどの贅沢さが身に染みて分かりますが、武蔵境校舎も中身は同じ基礎科学であり、教養課程です。苦労を重ね、受験を乗り越えて医学部に入学し、学友と出会い、いよいよ医学を学びクラブ活動にも精を出そうとする希望に満ちた学生たちにとっては極めて魅力的なところではありませんか。おそらく、これからの卒業生は「境は良かった」となっていくのでしょう。

今後、AI の発達により、いずれ各種検査データからの確定診断などは AI が医師の業務に取って代わる日が来るでしょう。そうなると、医師はますますその人間性が問われる時代となることは必至です。患者さん達の病はもちろんのこと、様々な悩みや不安、その背景までも汲み取って、患者に寄り添う医療を AI が出来るとは思えません。

医学を学ぶ上では、知識は自らが疑問や必要性を感じないと習得できないし、そのようにして習得した知識は簡単には消え去らないとして Problem Based Learning が重要視され、さらに近年は、基礎医学で習得した知識はすぐに臨床医学で応用しないと記憶に残らない、臨床医学での必要性を感じないと基礎医学を学ぼうとしないとして、基礎医学と臨床医学の垂直統合の必要性が叫ばれています。

しかし、医師というよりも人間としての基礎知識、教養はその学修に効率を求めるべきものではないと考えています。基礎科学は医学を学ぶための基礎課程であるとともに、これまでの人生の長い時間をかけて培ってきた知識や教養を昇華させ、医師になるための人間性を涵養する、人間としての基礎課程の場であり、今後ますます重要性を帯びてくるに違いありません。医学に特化し、効率を求めるあまり、既に基礎科学課程を廃した医学部もあるようですが、いずれ後悔して慌てて再編することになるでしょう。

日本医科大学の基礎科学は、過去からの永い歴史を携えて、今後もさらに益々発展していくと確信しています。日本医科大学基礎科学は永遠です―

（受付日　令和２年 12 月 1 日）
（受理日　令和２年 12 月 22 日）